

今ある平和について 考えてみませんか

郷土資料館

平成27年は、第二次世界大戦が昭和20年に終結して70年を迎えるという節目の年にあたります。

戦災体験者が高齢となり、戦後世代が多数を占める中で悲惨な戦争の記憶の風化を防ぐために、今を生きる私たちが過去を知ること、未来に残していけるものがきっとあるのではないのでしょうか。この機会に歴史を振り返り、戦争の悲惨さや平和な暮らしについて考えてみませんか？

人類史上最大の戦争と日本

70年前、日本は世界を相手にした戦争を終結しました。ドイツ・イタリア・日本とアメリカ・イギリス・中国・ソ連・フランスなどの連合軍が世界を股に掛けて戦った第二次世界大戦です。



霞ヶ浦上空を飛ぶ霞ヶ浦航空隊の軍用機。遠くに筑波山がみえる。

この戦争は、日本が昭和16年（1941年）にハワイ真珠湾攻撃を行い、アメリカに対し宣戦布告したことに始まります。

開戦とともに東南アジア諸国に進攻した日本は、欧米の支配下に置かれていた国々の独立を援助しながら連合軍を撃退していきまし。日本海軍の空母と戦闘機による機動部隊は、予想以上の戦果を開戦時にもたらしましたが、昭和17年のミッドウェー海戦で大敗北を喫します。その後、ソロモン海戦、アリューシャン海戦などで日本軍と連合軍の一進一退の攻防が繰り返されました。昭和18年ごろからは太平洋各地の日本軍の戦況が悪化していき、学徒にも出陣命令を出していきます。しかし、アメリカを中心とした連合軍は、圧倒的な軍力をもって攻撃を続け、本土決戦を防ぐため絶対国防圏の要とされたマリアナ諸島にも出撃していききました。そして、ついに昭和19年



▲戦地から実家へ送られた軍事郵便

には本土爆撃が行われはじめ、日本国中が恐怖に包まれる中、国内の主要都市はことごとく廃墟となりました。

この頃から爆弾を抱えて敵の艦隊へ体当たりする神風特攻隊が編成されていきました。昭和20年には、アメリカ軍の沖繩上陸、さらには広島と長崎に原子爆弾が投下され、とうとう日本はポツダム宣言を受諾し、太平洋戦争（第二次世界大戦）に終止符を打ちました。

太平洋戦争による被害と犠牲者

昭和12年（1937年）に始まった日中戦争以降の戦争で犠牲者となった軍人は230万人（外地210万人、内地20万人）で、民間人は80万人（外地30万人、内地50万人）、合計310万人に上るとされています。

最も犠牲者を出したのは、マリアナ沖海戦で約52万人、その次に中国本土戦争で約47万人で、外地で戦死した犠牲者の約127万人の遺骨は収集されていますが、約100万人の遺骨は収容されていません。

本土爆撃の候補に挙げた都市は、180箇所におよび、昭和20年3月の東京大空襲では、約6トンもの高性能焼夷弾を積載した約300機のB29戦闘機が火の雨を降らせました。1日で亡くなった

人の数は10万人に及ぶとされています。

アメリカ軍の上陸があった沖縄では多くの特攻隊員が出撃し、若い命を落としました。また、激しい戦闘に巻き込まれ亡くなった一般住民、日本軍の命令で強制集団死していった方など約20万人の尊い命が失われました。

◀政府から出された婦人常会への協力依頼の手紙。軍用の芋がらや軍馬用の茶がらの提供を婦人会へ依頼しています。



▶市内の民家が機銃掃射された際に打ち込まれた弾丸の薬莖



志戸崎にあった監視所の様子を伝える一枚

は、防空壕が遺棄されています。現在、入ることはできませんが地域の方が利用した話が伝わっています。

その他、土浦海軍航空隊は霞ヶ浦で様々な訓練を実施していましたが、霞ヶ浦の湖底に眠る戦争遺物が時折、漁網にかかり引き上げられることがあります。これまで軍用機のプロペラや模擬魚雷などが発見されており、郷土資料館で保管しています。模擬魚雷は、軍用機の機体に取りつけられ、霞ヶ浦に浮かべられたのをめがけて落とされた練習用の魚雷と考えられるものです。船体のほとんどは木製で造られており、全体をオレニンジに塗装し「霞空隊」と白文字で記されています。

かすみがうら市内には、戦争時を物語る跡がいくつに残されています。坂の慈眼寺の裏山には、監視所があって地域の方が交代で任務にあたっていました。加茂の平川に

かすみがうら市は、軍需工場や

飛行場などが設置されていなかったため、空襲を受けることはありませんでしたが、各地で機銃掃射を受けた話、落とされた爆弾が不発弾となつて埋没している話、一方で苦しい戦時中の生活を物語る資料が残されています。また、戦地へ赴いた方々の遺品も数多く残されており、出征旗・軍事郵便・写真などたくさんの資料が資料館に保管されています。

2年前に太平洋戦争時の特攻隊員を主人公にした百田尚樹著「永遠の0」が映画化されましたが、主人公の宮部久蔵のモデルと考えられる人物が、実はかすみがうら市の方でした。穴倉の角田和男さんです。角田さんは、惜しまれつつ2年前に亡くなられましたが、零戦

終戦から70年に何を考えるか

今から70年前に、日本国の存続のために我々の先祖は戦争を行いました。家族や友人を思う気持ちは、国を思う気持ちとなり、それらを守るべく一身に戦いました。現在、すばらしい日本国が存続していることは、すべて純粋な気持ちで露と消えた英霊のお蔭であることに忘れてはなりません。

一方で、日本はの戦争の経験から、二度とあのような悲惨で残酷

な状況を生み出さないために平和とは何かを問い続けています。しかし、戦争経験者が少なくなり、戦争に関する情報が伝わらなくなると、戦争に対する認識が薄くなつてしまいます。現代社会に生きる我々が次世代に戦争に関する情報を引き継がねばならないことも忘れてはなりません。

過去から未来を創造し、すばらしい日本国を存続させるため、70年前の日本人の気持ち、戦争をしてはいかでしょうか。そして、子から孫へ伝承し、いつの時代も平和な社会が引き継がれるような環境を整えていきましょう。

▼お知らせ

郷土資料館では、戦争体験者が少なくなる中、戦争について語り継がれる機会も減少していることに鑑み、戦後70年となる今年、企画展「語り継ぐ太平洋戦争」を11月1日（日）まで開催しております。戦争への反省と永遠の平和国家を考えていくきっかけになればと思います。ぜひ、ご来館ください。



▲霞ヶ浦湖底から引き上げられた霞ヶ浦海軍航空隊の模擬魚雷